

予餞会 1月31日(火)

三つの学年が一堂に会する今年度最後の行事、予餞会が行われた。吹奏楽部の演奏のなか、運営生徒の先導で三年生が堂々の入場。

運営生徒の進行の下、初めに館長が登壇され、かつての予餞会で印象に残った発言として「変わり者の自分を受け入れてくれた修猷に感謝します」という生徒のことばを紹介され、今年への期待を込められた。

続いて演芸。有志グループとコーラス部による心温まる歌が披露された。この後、入学以来の様々な場面をスナップしたスライド映像が流された。懐かしい写真が映し出されると三年生席は歓声に包まれた。

その後、メインの自由発言。多くの発言の中からいくつかを紹介する。

- ・私は運動会などの学校行事に全力でぶつかって。そして行事が終わったときは大泣きした。それほどの情熱を注いだことが私の誇りだ。
- ・ある人が遺産の黄金の壺を探して土を掘りまくったら、いつの間にか原野が開墾されていたという民話があるが、我々は大運動会において、あるかどうかわからない「成功」を真剣に探し回った。そこにすばらしい運動会が現れた。
- ・僕は中学校まで人に自分の弱さを見せまいと心を閉ざしていた。しかし高校では弱い自分も含めて自分をさらけ出せた。心を開くことが大切だ。修猷館には認めてくれる友達が大量にいる。
- ・光陰矢の如しというが、時間の方が矢よりも早い。弓道部で矢の速さをよく知っている僕の実感だ。1、2年生、どうか、かけがえない高校の時間を大事にしてくれ。
- ・私は1年生のころ何の目標も夢もない毎日を過ごしていた。だけど文化祭のステージ有志に思い切って参加したことで人生の目標を見つけることができた。夢や目標は何かをやらないと絶対に見つからない。
- ・先輩方が思っておられる以上に先輩方の背中は大きいです。
- ・夕焼けは赤い色をしています。では、永遠の夕焼けの色は何色でしょう。答えは...。言いません。皆さんで考えて下さい。
- ・運動会の他の行事にはない大きさは何か。それは議論があることだ。
- ・修猷館とは本気になって自分からチャンスを取りに行く場だ。受け身になってチャンスを待つ場ではない。
- ・人はなかなか変わらないというが、それは嘘だ。人は5日で変わるし、1時間で変わることだってできる。
- ・僕には会ったことのない兄がいます。生きていたら20才。この兄のことを思う時、今の毎日はあたり前のように実はあたり前ではないんだと実感する。自分は兄に見守ってもらっている気がする。君たちも誰かに絶対見守ってもらっている。
- ・「悔いのないように」とはよく言うが、皆さん、後悔をしよう。私達には選択の自由がある。そしてきっとどちらを選んでも後悔は生まれるだろう。しかし、そうやって後悔を繰り返しながら、私たちは自分の生きる空間を知り、自分の生き方を見つけていくのだ。
- ・私は修猷館に入ってこの学校に失望した。この学校が嫌いになった。ただそこで単に背を向けるのではなく、嫌いな奴なりにこの学校を変えていくことはできないかと考えて、応援歌指導を始めいろんな行事に積極的に参加してきた。いろんな人の考え(例えばアンチ修猷館の人の考え)に耳を傾け、そこから得るものはないかを考えるようになって欲しい。
- ・勉強のコツは人に勉強を教えることだ。今年初めての試みで3年生が1年生に勉強を教えた。教え合いの文化が修猷館を強くする。緩くて広いヒューマンネットワークを作ろう。1200人はもっとシャッフルされる必要がある。それは修猷館生活を爆発的に面白くする。教え合い、向上の道を進みゆけ。

最後に三年の学年団の中から生徒たちによって選ばれた英語科の[永嶋先生より生徒への言葉](#)が送られた。先生は、人生に重要な三つのことについて英語で語りかけられた。

総務の話の後、応援団が登場。最後の3学年全員によるエールと館歌である。三年生は下級生が声を振り絞って歌い続ける「玄南の海」に送られて講堂を後にした。こうして、すべて生徒会執行部により企画・運営される予餞会は今年も盛会のうちに終了した。

